

そもそも子どもは自信を持って生まれてきます。大切なのは、それを奪わないこと。「教育」とは、子どもに何かを与えることではなく、子どもが自分から何かを得ていけるように、手本を示すこと。良くも悪くも、子どもは大人の感情を真似するだけ。だから、まずは大人自身が自分の人生や将来に対して自信を持つことが大切。自分に自信を持てる人だけが、子どもの自信を守ることができると思っています。

(勉強を教えない塾 福田 幸志郎)

人はもともと自尊感情を成長の糧として持って生まれてくると思います。赤ちゃんは、すぐに思い通りにはならずとも何度も掴もうとし、這おうとし、立とうとします。親は子どもの育ちを通して、様々なことを教わります。自分の力を信じる気持ちや、誰かを愛すること、誰かから愛されることのすばらしさ。ときに日常の何気ないひとときのなかで、ときに差し迫った事柄を通じて、お互いの心をやり取りし確認しあっているのです。ですから、母親は出来るだけ正直に子どもと向き合い、感謝し、あなたはすばらしい自尊感情をすでに持っているということ子どもに伝えていきたいと私は思っています。

(ナナイロつーしん発行人 北岡 七夏)

この情報溢れる今の世の中において、何が一番良いのか、悩み多き子育て。結論から言うと、好きにしたらいいのです。我が子を信じて見守る、ただそれだけで良いのです。もし、「〇〇メソッドが良い」「△△論が良い」と聞いて、気になるならやってみれば良いのです。合わないなら、止めれば良いだけの話です。親子共々、楽しんでやることです。そして、その方法も子によって反応が全く違う場合もあることでしょう。それがその子の個性になります。

(宝地図ナビゲーター/11歳、14歳、18歳の子どもを子育て中 塙 久美子)

私には二人の娘(4歳と1歳)がいます。またNPO活動では多くの子どもたちと接します。子どもたちは驚くべき吸収力でさまざまなことを学んでいきます。大人である私たちが与える影響ははかりしれません。私が最も心がけていること、それは「どうせ無理」、「めんどくさい」などの言葉遣いをしないということです。「どうせ無理」はすべての挑戦を否定する言葉。挑戦→達成→自信という流れにもっていくためにも、まずは私たち大人がチャレンジを楽しむことで自信を持つこと、そこから子どもたちの自信が育まれるのではないのでしょうか。

(立命館大学准教授/NPO法人EN Lab.代表理事 荒木 寿友)

子どもの自信を育む、それはもしかしたら大人がまずそうでなければいけないような気がする、私です。子育ての中で、関わる大人が自信を持って子どもと向き合っていれば、子どもは知らずのうちにそれを知るのではないかと。子育ては時間のかかるものです。今がどうかより、その子の中にある可能性や能力を信じる力、そのまなざしが何よりも自信を育むような気がします。だから、大人がそれを信じることではないのでしょうか。自信とは、期待ではなく、その字のごとく、大人がまず自らを信じる、それが大切なことのように思うのです。

(LLC みらい ohana 石谷 真紀)

自信を育む上で大切なことは何か?大人は往々にして物差しで子どもをはかります。社会で生きる中で物差しは必要、しかしそれに合わせるだけで育った子どもの自信は傲慢で、一度崩れると脆弱なものです。私は子どもの存在や表現を100%認め、感性、認識力を高めることが大切だと思います。例えば小2で習う『スイミー』。教科書では「力を合わせれば弱者でも強い者に立ち向かえる」ことを教訓にしていますが、原作者レオ＝レオニは「海の中にいる生き物の多様性、いろんな命のありかたを自覚する大切さ」を描いています。そうした点数と関係ない背景に目を向け、それを子どもに伝える中で、人間力ある自信を身につけさせたいと私は思っています。

(学校法人ヴォーリス学園近江兄弟社小学校教員 鳥井 新平)

子どもは親に向けて「見て欲しい」「認めて欲しい」「愛情を感じたい」と常日頃、様々なアピールをしています。その時々が自信を持たせてあげられる&愛情を伝えられるチャンスです。物事をこなせる自信も大事ですが、親に愛されているという実感こそが、自分自身を大切に出来る最も大きな自信となります。褒めるときも叱るときも、その目的の一つに自尊感情を育むことを意識して言葉をかける。それが愛情を伝えるコツでもあります。

(子どものSOSソングライター 悠々ホルン)

子どもがやりたいと思うことを見つけ、大人はそれを応援すること。「やりたかったらやってもいい」と伝える。やり始めたら気持ちの変化を喜ぶ。出来上がったなら「よくできたね!」ではなく「よくやろうと思ったね!ここ難しかったでしょ!」と伝える。失敗してもいいのです。結果は後からついてきます。大切なのは、できたかどうかではなく頑張ろうとしたかどうか。そこを大人が見ると、子どもは「わかってもらえている」と感じ、失敗しても「もっと頑張ろう!」と思えるのです。それが意欲となり自信へとつながります。

(特定非営利活動法人 子ども自立の郷ウォームアップスクールここから理事長 唐子 恵子)

日頃心がけているのは、自分の気持ちを、子どもに伝わる言葉にして丁寧に伝えるということ。自分の「感情」をつかんで言葉で表現するのは、子どもにとって至難の業。だからこそ、大人から気持ちを言葉で伝えるのです。日々言葉を伝えていると、子どもたちからも言葉が返ってくる。適当な言葉が思い浮かばず、思案顔のときは助け舟。「それはイライラしているのかな?」とか。感情に正しい言葉をくっつけるお手伝い。言葉にすることで自分の感情の正体がわかり、外に吐き出すことができるとかんしゃくを起こすことも減ってくる。気持ちが通じれば、「わかってもらってる」って安心感が得られますからね。

(マザーウテラス代表/7歳男児・4歳女児のママ 中島みちる)

大人の目から見てもどんなに無意味なことに見えても、好きな遊びを子どもらのペースで好きに徹底してやれるように放置する。うちの息子(小4)は僕に似て妄想癖があって、家中に隠れている見えない敵をオモチャの鉄砲で常に撃ち殺しています。そんな姿に干渉せず、やりたいように遊ばせる。「自信」は外から与えられるものではなく、自分自身で感じて、考えて、動くことでしか生まれられないと思うから。大人目線を押し付けられないことが大切かなと思います。

(原っぱ大学 ガクチョー 塚越 暁)

大切なのは体験。親や周りからやれと言われたものをしてる限り、子どもの自信は育ちません。